素顔 ニッポン製造業に賭ける経営者

暑く熱い熊谷にて

株式会社秋山製作所　代表取締役社長

秋山　哲也

親父は最悪の評論家

「あ、コレ撮られちゃまずいな」と哲っちゃんが言った。工場で、ひょいと製品を手にとった哲っちゃんにカメラを向けたときのことだ。

「いや、企業秘密ってやつ。ま、コレつかってるエンジンをばらして取り出せば、わかっちゃうことではあるんだけどね。でも、そのときには1台売れてるわけでしょ。だから、いいかなって」そう言うと、フフンと笑った。

熊谷は暑い。この日もきっちり25度を超す夏日になった。これからの季節は35度を超える酷暑の日もめずらしくない。

「どうでもいいことには細かいA型」だという哲っちゃんが父・文作さんの後を継いで秋山製作所の社長に就任したのは28歳のときだ。創業者の文作さんは還暦を迎えたのを機に、工場の変革を息子に託したということか?

「いや、それがちがうんですね。当時はバブルの絶頂期。日本じゅうがバラ色のときだったでしょ。親父はだれが社長やってもおなじだと思ったんじゃないかな」

いずれにせよ、以来、文作さんは会社経営にいっさい口をはさむことはなくなった。バブルが弾けたときにも「〝俺は知らねえよ〟ですからね。〝世の中が悪くたって、自分のとこが悪くなるとはかぎらないわけだろ〟って。まあ、いまじゃあ最悪の評論家ってとこですね」

ほんとは二番目の兄貴が継ぐはずだった

「親父としては、ほんとは二番目の兄貴に継がせたかったんじゃないかな」と哲っちゃん。

哲っちゃんの上には2人の兄がいる。

「二番目は努力する優秀な人でね。医者になりたいって言ったら、親父が〝国立の医学部に受かったら行かせてやる〟って。ほら、国立の方が学費がかからないでしょ。そしたら兄貴、しっかり受かってね」

それから中学生の哲っちゃんは、両親から「まわりくどく」後を継ぐように言われた。高校も両親の勧めで国立高専に進んだ。

「親としては、僕が普通科に進学して、なにかほかのことをしたいって言い出すのを恐れたんじゃないかな。こっちも〝国立〟ってくっついてるのがカッコイイように思えたし。高専は5年制で〝大学行かなくていいよ〟って言われたしね」

まあ、だとしても、親に勧められての中学生の判断だ。高専入学後は勉強に身が入らず、遊んでばかりいて、2年生を3回やった。

卒業する頃には、それでも後を継ぐものと思うようになっていた。だから、「行ったらどうだ」と文作さんに言われて取引先の会社に〝修行〟として勤めることにも疑問を持たなかった。「〝どうせ後継ぐんだから、お客さんと懇意になっておいた方がいい〟って言うんですよ」

哲っちゃんはその会社に3年間勤めて、25歳で秋山製作所に入社する。

「親父に対しては反発っていうのとはちがうんじゃないかな。じつはちゃんと話をしたことがないんですよ。入社したときから、指導も指示もいっさいなかったな」

同じ市内に住む文作さんとは、いまも年にほんの数回しか会うことがないと言う。

「今年も正月に会ったきりですよ。向こうも接触してきませんしね。街では〝不仲な親子〟って有名らしいですよ。でも、そんなんじゃなくて、少し距離をおいてる方がうまくいくんですよ」

いちばん楽しいこと

若かりしころからの趣味を羅列すると、サッカー、バスケット、スキー、サーフィン、バイク、自動車の改造、ゴ

文＝上野歩（うえの・あゆむ）
作家、専修大学講師。『恋人といっしょになるでしょう』で小説すばる新人賞を受賞。著書に『チャコールグレイ』、『朝陽のようにそっと』（以上、集英社）、『愛は午後』（文芸社）など。ホームページ《上野亭かきあげ丼》http://www1.odn.ne.jp/ayumu

一人娘の円香ちゃん(3歳)と。
仕事でのストレスは円香ちゃんとショッピングに行くことで解消!

仕事は家族のために。
このひと時のために営業・技術・
経営の三役をこなす。

ルフ、スキューバダイビング、そば打ち、絵画、絵画鑑賞、読書、旅行、食べ歩き、飲み歩きなどなど。そうして、いまもつづけているものとなると、絵画鑑賞、読書、旅行、食べ歩き、飲み歩きと整理された。

道具は用意したもののはじめていないものに絵手紙とパスタづくりがある。入会したけれどサボっているのはヨガ。

「女房殿に言わせると、僕の趣味は無駄遣いらしいですね」

たしかに哲っちゃんは、モノを買うのが好きだ。道具が好きなのだ。ダイエット器具も買っただけで使わないで家に置いておいたら、だれかが持っていった。

そんな哲っちゃんが、いまいちばんたのしいときは、週末にくだんの女房殿・陽子さんと一人娘・円香(まどか)ちゃんとともに自宅から歩いて5分ほどのところにあるショッピングセンターに出かけることだという。買うのはもっぱら食料品だ。どこになにを売っているかつぶさにおぼえていて、陽子さんは「我が家の冷蔵庫」と冗談まじりに言う。

「たしかにショッピングは大好きです。これが、いちばんの趣味かも——いや、きっといちばんの趣味は仕事ですね。とくに営業は大好きです。うちの場合、基本的にリピート品の生産ですから、いちど受注がきまると5年くらいはつづけて注文がきます。

反面、新規の客先の獲得はたいへん厳しく、そしてたいへん重要です。新規獲得ができたときには、ほんとうにやりがいを感じるし、そうした新しいお客さんに喜んでいただいたりすると、すこしは世の中のためになっているって実感できます」

文作さんは職人。なんでも自分でやっていた。哲っちゃんの場合は「自分の技を極めようという考えもないので、人に任せるスタイル」だという。

「あと、これは親父にかぎったことではないんですが、職人気質というだけでなく、多くの先達が高度成長期にのっかって事業を営んできています。そのために、これは生意気な言い方ですが、製造業の人たちって営業がヘタですね。ヘタというより営業をしない。僕の場合は、工場の操業度が高くても営業だけは大切にしています」

哲っちゃんの夢

社長になった哲っちゃんが、最初に思ったことは「なにがあっても、絶対に会社をつぶさない」ということだった。

「あとは、みんなが幸せになれるってことですね。とくに従業員全員が。そしてご協力いただけるまわりのみなさんが。もちろん、お金を支払ってくれるお客さんもです。自分たちが幸せになりたければ相手に幸せになってもらうことが大切だと常々社員には話しています」

多趣味な哲っちゃんはボクシングに挑戦したことがある。84キロあった体重は2年のあいだに68キロまで落ちた。強烈なパンチをもらってリングで気絶したことも。しかし、ボクシングをやめたいま体重は90キロになっている。

ボクサー哲っちゃんは引退したが、プロのセコンドライセンスを取得し、いまもリングに上ることがある。

「いやあ、所属してたジムが貧乏で、無償でやる人間をさがしてたんですよ」

ボクシングは個人競技ではなく団体競技だというのが哲っちゃんの理論だ。ボクサー、チーフセコンド、セコンドの3人で戦うものである、と。

社長の仕事はセコンドに似ているかもしれない。

「社長の仕事は、社員全員が安心して仕事ができる場の提供だと思っています。給料もそうだし環境もそう。仕事量もそうだし、将来性も」

そんな哲っちゃんの夢とは?

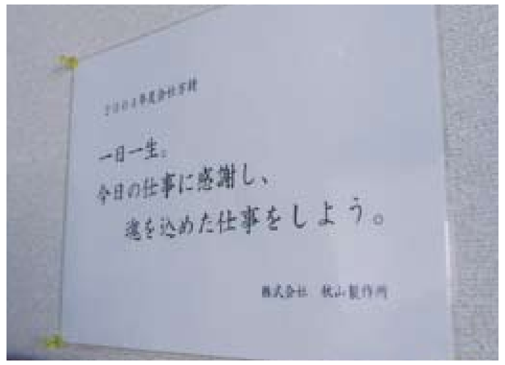
「夢っていろいろな場面があると思うんですね。こんな仕事をしたいとか、こんな人になりたいとか。だから、ひとことで言えないなぁ。モンツァサーキットでのイタリアGPにフェラーリで乗りつけて、うちの会社で製作したクランクシャフトを搭載したフェラーリF1マシンを応援する、なんてすごいことですよね。"アキヤマのクランクシャフトでないとF1に勝てない"なんて世界じゅうのエンジニアに言わせることができたら……。いまのうちの実力では夢のまた夢だけど、なにごとも小さな思いからはじまるわけですからね」

バブルのころ、設備投資して工場のロボット化をはかった。そうやって量産できることをうれしく感じたこともあった。だが、間もなく哲っちゃんはロボットをはずした。

「中小企業って、ロボットができることをしてちゃいけないと思ったんですよ」

熊谷は暑い。哲っちゃんは暑いのが苦手だ。熊谷の冬もめっぽう寒い。哲っちゃんは寒いのも苦手だ。

現場とのコミュニケーションを大切にする。現場主義と言うは易し、貫くは難し。



製造業の基本は製品に魂を入れること。
よく遊び、よく学び、よく働く。町工場社長の鉄則である。

現場での哲ちゃん。時には怒鳴ることもあるという哲っちゃんは現場でも陣頭指揮を取る。「町工場ですから・・・」

取材協力　ホテルサンルート熊谷